富士特殊紙業株式会社 杉山真一郎社長に聞く

米国とイスラエルによる対イラン戦争は中東の石油輸出基地、ホルムズ海峡の事実上閉鎖を招き、日本の石油由来製品の流通事情を一変させた。入手不安から建築、医療分野などで目詰まりが発生、深刻な事態が表面化した。そんな中、食品パッケージを製造販売、早い時期に油性から水性グラビア印刷に転換したユニークな会社が愛知県内にある。富士特殊紙業株式会社（本社・瀬戸市暁町3-143）で、新たな戦略も視野に入れる同社の杉山真一郎社長に危機対応について聞いた。

水性印刷の食品包装で〝原油危機〟回避へ
石油由来製品の目詰まり、深刻事態を新たな転機に

―御社の製品数、契約社は。

杉山真一郎社長　契約先は300社ぐらいで、製品は数千点以上あるでしょうね。食品パッケージと言っても、ジッパー付きのものからポテトチップス等の袋に採用され、横方向に開封するスマートカット、スクリューキャップで液体や粉などを入れたボトル機能を持たせたスパウトなど様々です。当然、色や形は千差万別で、受注に応じて印刷して納品しています。

―創業は1950年。今年は77年目になります。

杉山社長　創業者は私の母方の祖父で、当初は紙やセロハン等に印刷していました。パンの包装やキャラメル包装のロウ引き紙の製造ですね。現在相談役の父が専務だった1993年に会社を名古屋市西区から瀬戸市に移転、工場も新設しました。当時はインクを薄める溶剤にトルエンを使っていましたが、匂いがきつく、発がん性も疑われました。父の口癖は、パッケージは30年、40年後もなくならないが、印刷現場は危険（印刷機の回転体や刃物を使う）、きつい（夜勤）、汚い（インクを扱う）等仕事がきつく「印刷をやる人が将来いなくなる」でした。社員の健康のために職場環境を改善したいと考えた父がチャレンジしたのが、油性から水性印刷への転換でした。

フジトクの技術が生み出す数々のパッケージ製品

―画期的な技術ですね。

杉山社長　はい。関係企業などと協力して研究開発し、完成させました。ビニールだと水性ペンのインクを弾いてしまいますよね。だから油性を使います。水性印刷をする会社がない時代で、商業ベースで水性を実現したのは世界でも初めてだったと思います。水性の内訳をより正確に言うと、50％が水でアルコール25％、顔料や樹脂が25％といったところですが、100％有機溶剤の油性インクに比べてCO_2の排出量も大幅に減らせました。

―職場環境改善がビジネスに繋がりました。

杉山社長　印刷手法以外にも30年前から定年を66歳にして、ベテランの経験、技術を生かしてもらい、若手社員を育成したほか敷地内に保育所を設けて、安心して働いてもらえる環境も早くから整えました。

―食品パッケージ印刷で油性の割合は。

杉山社長　市場に出ている99％が油性ですね。弊社の全国シェアはまだわずかですから。

―ところで、イラン戦争で石油由来製品の品薄、価格高騰が指摘されています。

杉山社長　原油やナフサは足りている、来年まで大丈夫と政府は言っていますね。食品パッケージについてだけで言えば、想定以上に供給されていると思います。フィルムの出荷量は戦争開始後3、4月も前年比110％出ていました。